

大阪市立大学生活科学部紀要・第45巻（1997）

老年期の自尊感情に関する一研究

— 属性要因・ソーシャルサポートの授受評価要因などとの関連において —

橋本有理子・本村 汎

A Study on Self-Esteem of the Elderly : Its Relation to Attributive Factors and Social Supports

Yuriko Hashimoto and Hiroshi Motomura

問題意識と目的

老年期は研究者の間で、「喪失期」と位置づけられる場合がある⁶⁾⁷⁾一方、井上⁸⁾のように、老年期を「挑戦期」と位置づける場合もある。しかし、具体的な個人に焦点を当てれば、同じ老年期といっても、そのとらえ方は、高齢者一人ひとりによって異なると考えられる。ところで、実際の研究では、老年期は「喪失」という用語で特徴づけられている場合が多い。いまいし具体的にいえば、例えば、長谷川⁷⁾は、「心身の健康の喪失」「経済的基盤の喪失」「社会的つながりの喪失」「生きる目的の喪失」の四つで特徴づけ、また、藤田⁶⁾も、老年期の喪失体験に関して、「健康の喪失」「経済の喪失」「役割の喪失」の三つを指摘している。

そこで、本論文では、これらの喪失体験が高齢者の自尊感情にどのような影響を与えるのかを先行研究をふまえて明らかにしていきたい。

大和ら²⁰⁾は、自尊感情を規定する要因として、老年期の個人的な喪失体験を指摘しているが、それに加えて、個人を取りまく社会的環境を指摘している。これは、高齢者の自尊感情が他者との関わりによっても変化しうることを示唆している。「他者との関わり」という場合、それにはいくつかの次元が考えられるが、自尊感情に対する影響要因という視点からは、ソーシャルサポートの次元が重要と考えられる。特に、老年期を「喪失期」としてとらえた場合、岡堂¹⁷⁾も指摘しているように、高齢者にとっては、他者のために役立ち、他者から必要とされ、他者に愛され、そして他者から大切にされているという感情体験は、極めて重要な意味をもっている。すなわち、それは、高齢者の「自信」と「所属感」を保持することに決定的に重要であり、高齢者自身が自分の「存

在意義」を自覚することになると考えられる。

以上の論考をふまえて、本研究では、高齢者にとって、「配偶者」の次に重要な他者として考えられる「最も頼りにしている既婚子」をソーシャルサポートの授受の相手として位置づけ、高齢者が提供する生活的、物質的、情緒的サポートによる高齢者自身の充足感と高齢者自身の自尊感情との関連性を明らかにすると共に、逆に子どもが提供する各ソーシャルサポートによる高齢者自身の満足感と高齢者自身の自尊感情との関連性もあわせて明らかにしていきたい。

方法

1 データ収集の手続きと調査対象者

調査方法は、大阪府下における60歳以上の男性・女性を対象として、以下の二通りで行なっている。

第1の方法は、大阪教育大学老人講座（大阪府柏原市）と、高齢者教養大学（大阪府堺市）の受講者には、講義時間後に質問紙を配布し、次回の受講日に、回収箱に記入後の質問紙を入れてもらうという留置調査法を使用した。第2の方法は、知人の協力により、知人の友人に質問紙を配布・郵送し、記入後の質問紙を返送用封筒で郵送してもらうという郵送留置調査法を使用した。

調査期間は、1996年9月下旬から10月下旬にかけて行なわれ、618の配票で363票回収した（回収率58.7%）。本研究では、大阪府下のサンプル・データを分析の対象としているため、回収された363票のうち、他府県の回答者17票と、記入もれなどの無効票23票を分析対象外とし、323票を分析対象としている（有効回答率52.3%）。

なお、調査対象者の性別、年齢、世帯類型に関しては、表-1に示すとおりである。

表-1 調査対象者の属性

	男性	女性
性別	186 (57.6%)	137 (42.4%)
年齢		
60歳 ~ 64歳	29 (15.7%)	32 (23.4%)
65歳 ~ 69歳	76 (41.1%)	45 (32.8%)
70歳 ~ 74歳	47 (25.4%)	33 (24.1%)
75歳 以上	33 (17.8%)	27 (19.7%)
無回答	1	0
世帯類型		
単独世帯	6 (3.2%)	25 (18.2%)
夫婦のみの世帯	105 (56.8%)	54 (39.4%)
夫婦と同居子世帯	69 (37.3%)	26 (19.0%)
同居子との世帯	3 (1.6%)	27 (19.7%)
その他	2 (1.1%)	5 (3.6%)
無回答	1	0

II 分析枠組

図-1に示すように、分析モデルとしては、対象者の属性要因、心理的・社会的要因、そして各ソーシャルサ

ポート（生活的サポート、物質的サポート、情緒的サポート）の授受評価の三変数を説明変数とし、対象者の自尊心を被説明変数とするモデルを設定している。

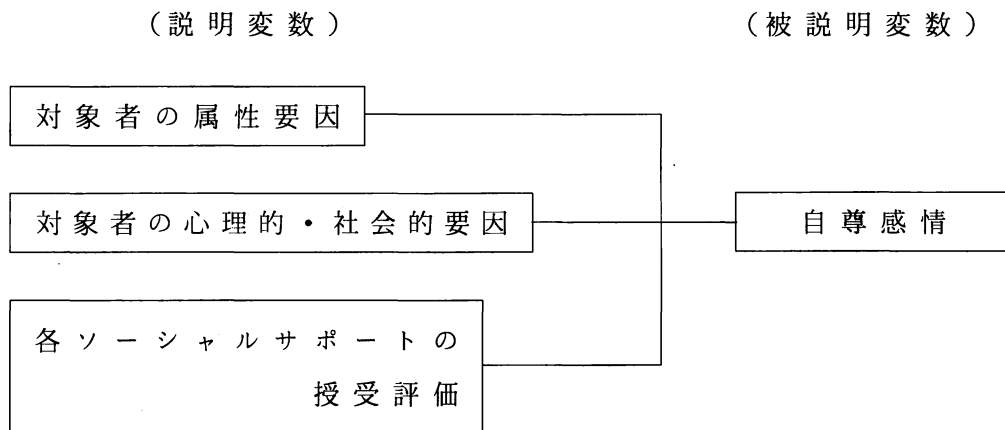


図-1 分析モデル

III 変数の指標化

① ソーシャルサポートの授受評価尺度

ソーシャルサポートの授受評価尺度は、野口¹⁶⁾が作成した「手段的サポート」「情緒的サポート」や、河合・

下仲¹⁷⁾が作成した「生活的サポート」「物質的サポート」「情緒的サポート」を参考に作成されている。「生活的サポート（例、家事の手伝いや病気の時の世話）」「物質的サポート（例、経済的な援助や贈り物の贈答）」そして、

「情緒的サポート（例、話し相手になる・相談にのる）」は、例示された項目を含めてそれぞれ2項目から成り、

したがって、ソーシャルサポートの総合尺度は計6項目から構成されている（表-2）。

表-2 ソーシャルサポートの授受評価尺度項目

- ① 買物・掃除・洗濯・食事の準備を助ける。
- ② 病気の時に看護する。
- ③ 金銭の貸し出しや経済的援助をする。
- ④ 物をあげたり、おくったりする。
- ⑤ 話し相手になる。
- ⑥ 悩みごとがあった時、相談にのる。

それぞれのソーシャルサポートの提供次元の評価指標としては、上述のサポート項目内容に関して、「十分な支援をしてあげていると思うか」を設定し、そして、ソーシャルサポートの受領次元では、「支援対象者が支援に満足していると思うか」を設定し、それぞれの次元において、「そう思う（5点）」から「思わない（1点）」の五件法で評定を求めた。その合計得点がそれぞれソーシャルサポートの提供評価得点、受領評価得点である。

②自尊感情尺度

自尊感情尺度は、Rosenberg¹⁹⁾が作成し、山本・松井・山成²²⁾が翻訳した、10項目から構成されている（表-3）。Rosenbergの自尊感情尺度は、本来米国の高校生の自尊感情を測定するために開発されたものであるが、その後、

Atchley¹²⁾やCottrell⁴⁾による定年退職後の適応度、Kaplan & Pokorny¹⁰⁾による年齢と自己の態度の関係、Ward²⁰⁾による老化の態度等の調査で高齢者を対象に実際に使用され、その妥当性も認められており、また実施方法の簡易さ、表現の簡潔さからみても、現段階では、高齢者の自尊感情を測定するには最も適していると評価されている²³⁾。回答は、各項目に対し、「そう思う（5点）」から「そう思わない（1点）」の五件法で評定を求め、その合計得点を自尊感情得点としている。

IV 尺度の信頼性

表-4に、各尺度の信頼性を表すCronbachの α 係数を示しているが、いずれの尺度も概ね高い α 係数が得られており、十分な内的一貫性をもつといえる。

表-3 自尊感情尺度項目

- ① 私は少なくとも人並みには、価値のある人間である。
- ② 私は色々な良い素質をもっている。
- *③ 私は敗北者だと思ふことがよくある。
- ④ 私は物事を人並みにはうまくやれる。
- *⑤ 自分には自慢できるところがあまりない。
- ⑥ 私は自分に対して前向きな態度をとっている。
- ⑦ 私はだいたいにおいて、自分に満足している。
- *⑧ 私はもっと自分自身を尊敬できるようになりたい。
- *⑨ 自分は全くだめな人間だと思ふことがよくある。
- *⑩ 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。

*は逆転項目

表-4 各尺度の信頼性係数 (α係数)

	全体	男性	女性
ソーシャルサポート尺度			
生活的サポート 提供	.71	.70	.72
生活的サポート 受領	.92	.93	.91
物質的サポート 提供	.71	.70	.70
物質的サポート 受領	.79	.79	.80
情緒的サポート 提供	.89	.94	.75
情緒的サポート 受領	.95	.96	.94
自尊感情尺度	.79	.78	.81

結果と考察

1 属性要因と自尊感情との関係性

対象者の属性要因と自尊感情との関係性を検討するために作成されたのが表-5である。

①性別と自尊感情

表-5が示すように、性別が自尊感情に与える影響差は、t検定の結果、有意傾向であり、自尊感情は、男性のほうが女性より高い傾向にあるといえる。

この知見は、大和ら²³⁾の調査研究における、「男性のほうが女性より自尊感情が高い」という結果や、Murray & Huelskotter¹⁴⁾が述べている、「女性とは自分たちの達成したものについて男性より低く評価する傾向があり、その見方が自尊感情に否定的な影響を及ぼす」という知見と一致している。その背景には、日米の如何を問わず、社会における男女の地位・役割による差異¹⁵⁾が存在し、それが影響しているのではないかと考えられる。

②年齢と自尊感情

表-5にみるように、年齢が自尊感情に与える影響差は、t検定の結果、前期高齢者、後期高齢者の中で、統計的に有意ではなかった。これは、Breytspraak & George³⁾やKaplan & Pokorny¹⁰⁾の「年齢と自尊感情とは基本的に無関係」とする説を支持するものである。

③配偶者の有無と自尊感情

表-5が示すように、配偶者の有無が自尊感情に与える影響差は、t検定の結果、有意傾向であり、自尊感情は、配偶者を「もつ人」のほうが「もたない人」よりも高い傾向にある。

ところで、どうして、そのような違いが生じてきたのであろうか。配偶者という対象が存在しないことの背景

には、いくつかの場合が考えられる。一つは、意図に反して、病気や事故などで配偶者がいない場合であり、いま一つは、離婚ケースにみられるように、自らの主体的意志で、配偶者を持たない場合である。前者は、自らが配偶者としての役割を喪失することにつながり、後者は、配偶者としての役割からの主体的離脱につながる。後者であれば、役割からの解放感を伴うかもしれないが、前者であれば喪失感を伴うことになり、自尊感情に影響を与える要因になるのではないかと考察できる。

④最も頼りに出来る子どもの有無と自尊感情

表-5にみるように、最も頼りに出来る子どもの有無が自尊感情に与える影響差は、t検定の結果、両群の間ではみられなかった。

最も頼りに出来る子どもがいない高齢者の背景には、いくつかの理由が考えられる。一つには、子どもをはじめから持たない場合、そしていま一つは、子どもを持つてはいるが、最も頼りに出来る子どもがいない場合である。

子どもをはじめから持たない高齢者は、配偶者以外の家族には頼ることができない危機感を老年期以前から感じ、自分一人で、あるいは配偶者と共に生きていかなければならないという自立が芽生えやすいのではないかと考えられる。これはまた、子どもを持つものの、最も頼りにしている子どもがいない高齢者でも考えられることである。子どもには頼ることができないという意識が、自立心を芽生えさせ、家庭以外の領域にも目を向けやすくなるのではないかと考えられる。そのため、最も頼りに出来る子どもの有無が、必ずしも自尊感情の高低レベルに影響を与えなかったのではないかと考察できる。

表-5 属性要因による自尊感情の比較 (t-test)

		N	Mean	SD
性別	男性	186	37.23	5.83
	女性	137	36.09	6.42
			t=1.67 +	
年齢	前期高齢者	262	36.82	6.04
	後期高齢者	60	36.33	6.46
			t=0.58	
配偶者の有無	有	259	37.08	6.04
	無	62	35.58	6.27
			t=1.74 +	
最も頼りに出来る子どもの有無	有	288	36.90	5.85
	無	34	35.24	7.87
			t=1.19 ※	
友人の有無	有	237	37.60	5.36
	無	78	33.86	7.34
			t=4.16 *** ※	
職業の有無	有	57	38.47	5.81
	無	264	36.38	6.12
			t=2.36 *	

両側検定

+ p<.10, * p<.05, *** p<.001

註(※): 分散が等質でないため、個別分散のt検定を行っている。

⑤友人の有無と自尊感情

表-5が示すように、友人の有無が自尊感情に与える影響差は、t検定の結果、両群の間でみられ、友人を「もつ人」のほうが「もたない人」よりも高いといえる。

Kahn & Antonucci⁹⁾は、個人が、加齢に伴う役割移行・役割変化によって生じる役割ストレスに対処する際には、その個人をまわりから支える援助システムが重要であると指摘している。このように、彼らの提案する援助システムとしてのコンボイ・システムの中には、最も重要度の高いメンバーの一人に「親友」があげられている。「親友」は、主要な役割変化に伴って役割喪失が生じた際に、その喪失からくる衝撃を緩和する役割を果

たす可能性がきわめて高い¹⁰⁾と考えられ、友人の有無が自尊感情に影響を与える要因になるのではないかと考察できる。

⑥職業の有無と自尊感情

表-5にみるように、職業の有無と自尊感情との関連では、t検定の結果、職業を「もつ人」のほうが「もたない人」よりも高くなっている。このような違いは、次のような事実からきているように思われる。

職業をもたない人の中には、定年退職者も含まれているが、定年退職を役割という視点からみると、それは、高齢者が「現役」という手段の役割活動から完全に離れ、稼ぎ手としての役割を喪失し、場合によっては、依存者

としての役割にあまじなければならぬことが、この両群の自尊感情の違いと関係があるように考えられる。

II 心理的・社会的要因と自尊感情との関係性

対象者の心理的・社会的要因としては、本研究では、「主観的健康感」「経済的満足感」「地域社会参加度」を設定した。対象者のその心理的・社会的要因と自尊感情との関係を示したのが表-6である。

①主観的健康感と自尊感情

表-6が示すように、主観的健康感が自尊感情に与える影響差は、t検定の結果、主観的健康感の「高い人」のほうが「低い人」よりも高い傾向にあるといえる。

大和ら²³⁾の調査研究においても、主観的健康感の高い人は、自尊感情が高いという結果になっており、欧米のこれまでの研究、例えば、Ward²⁴⁾やTaft²⁰⁾らの研究によっても指摘されている。これは、すなわち、健康でないことは、家族や社会から「依存者」としてラベリングされる可能性があり、それに対して、健康であることは、他者や社会との関係においても躊躇することなく、様々な活動に参加することができる機会にも恵まれる可能性が高いことと関係があると考察できる。

②経済的満足感と自尊感情

表-6にみるように、経済的満足感が自尊感情に与える影響差は、一元配置分散分析の結果、三群間の自尊感情の間に、有意差が認められた。LSD法を用いた多重比較検定を行なったのが表-6-aである。その結果、経済的満足感の高い人と、どちらでもない人・低い人との間に有意差がみられ、自尊感情は、経済的満足感の「高い人」のほうが「どちらでもない人・低い人」よりも高いといえる。

わが国は充実した高齢者福祉サービスを提供・受領することのできる発展途上にあり、その状況の中で豊かな老後を迎えるには、「経済力」が非常に重要な要素であり、また、経済力が低下すれば、他者や社会との活動力も低下してくるのではないかとと思われる。さらに、親としての高齢者が子どもとの関係的地位において対等性を維持できるのか、あるいは子どもの依存者となるのか、という決定的要素の一つに、この「経済力」があげられる¹³⁾のではないかと考えられ、経済的満足感が自尊感情に影響を与える要因になるのではないかと考察できる。

③地域社会参加度と自尊感情

表-6が示すように、地域社会参加度が自尊感情に与える影響差は、一元配置分散分析の結果、五群間の自尊感情の間に有意差が認められた。LSD法を用いた多重比

表-6 心理的・社会的要因による自尊感情の比較 (t-test/ONEWAY)

		N	Mean	SD
主観的健康感	高	282	36.98	6.05
	低	40	35.00	6.32
			t=1.93 +	
経済的満足感	高	189	37.89	5.83
	どちらでもない	68	36.03	6.18
	低	63	34.05	6.04
			F=10.50 ***	
地域社会参加度				
	週に1回以上	121	37.97	6.14
	月に1回以上	99	36.30	5.26
	2, 3ヶ月に1回以上	14	38.71	5.34
	年に1, 2回ほど	33	37.09	6.73
	ほとんどない	53	34.17	6.58
			F=4.24 *	

両側検定

+ p<.10, * p<.05, *** p<.001

表-6-a 経済的満足感高低別 自尊感情の多重比較

	低い	どちらでもない	高い
低い			
どちらでもない			
高い	*	*	* p<.05

表-6-b 地域社会参加度別 自尊感情の多重比較

	ほとんどない	月に1回以上	年に1,2回ほど	週に1回以上	2,3ヶ月に1回以上
ほとんどない					
月に1回以上	*				
年に1,2回ほど	*				
週に1回以上	*				
2,3ヶ月に1回以上	*				* p<.05

較検定を行なったのが表-6-bである。その結果、地域社会に参加している人と、ほとんど参加していない人との間に有意差がみられ、自尊感情は、地域社会に「参加している人」のほうが「ほとんど参加していない人」よりも高いといえる。

老年期は、「喪失の時代」とも言われるように、「配偶者の喪失」「職業の喪失」「健康の喪失」などの大きな喪失感を経験する可能性が高く、そのような喪失感を体験することを回避することは困難であるかもしれないが、社会的活動は、その喪失感が及ぼすマイナスの影響を緩和する、一種の「緩衝帯」としての機能を果たすことが指摘されている¹²⁾。そのため、地域社会に参加することは、まわりに対する自らの有用感をもてる「プラスの影響」だけでなく、「マイナスの影響を緩和する」機能も持ち合わせており、地域社会参加度は、自尊感情に影響を与える要因になるのではないかと考察できる。

III 各ソーシャルサポートの授受評価と自尊感情との関連性

男性・女性別に、各ソーシャルサポートの授受評価と自尊感情との関連性を示したのが、表-7である。

この表-7が示すように、男性では、物質的サポートの提供による有用感と自尊感情との間に有意な正の相関が認められ、物質的サポートの提供による有用感が高くなるほど、男性高齢者の自尊感情が高まっている。これは、男性のみにみられる結果となっている。このように、

性差が生じた背景には、物質的サポートである経済的な援助は、老年期以前から男性が担ってきたことと関係があると考えられる。すなわち、男性は、「現役」を退き、年金生活に入っても、その年金が自分の就労時の賃金を資源としていることもあって、経済力の面で、自負心を持っていると考えられ、この自負心が、男性高齢者の自尊感情を高めたと考えられる。いま一つの考察としては、老年期以前に維持し続けてきた父親としての権威的地位・役割が老年期にも保持されており、それが高齢者の自尊感情を高めたといえる。このように、「子どもから必要とされている」と高齢者自身が感じることで、すなわち「有用感」が高齢者の自尊感情に影響を与える重要な要因として考察できる。

一方、女性では、生活的サポートの提供による有用感と自尊感情との間に有意な正の相関が認められ、生活的サポートの提供による有用感が高くなるほど、女性高齢者の自尊感情が高まっている。これは、女性のみにもみられる結果となっている。その背景には、生活的サポートである家事の援助や病気の時の世話などの日常生活上の援助が、妻・母親の立場にある女性によって、老年期以前から行なわれてきたことと関係があると考えられる。すなわち、老年期、特に母親の立場にある女性の場合、子どもの独立、結婚さらには離家により、母親の役割を終了したとはいえ、子どもに対して日常生活上の援助を十分に行なっているという自負心があり、それが女性高齢者の自尊感情を高めている。結局、老年期以前に守り

表-7 各ソーシャルサポートの授受評価と自尊感情との相関 (ピアソンの相関係数)

		男性 (自尊感情)	女性 (自尊感情)
支援提供 次元	生活的支援・有用感	.270 (N=14)	.460 ** (N=21)
	物質的支援・有用感	.400 ** (N=39)	.105 (N=31)
	情緒的支援・有用感	.186 (N=79)	.068 (N=52)
支援受領 次元	生活的支援・満足感	.428 * (N=21)	.195 (N=25)
	物質的支援・満足感	.082 (N=15)	.411 (N=10)
	情緒的支援・満足感	.240+ (N=59)	.188 (N=52)

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01

続けていた母親としての地位・役割が老年期にも何らかのかたちで保持されていると考えられる。このように、「子どもから必要されている」と高齢者自身が感じること、すなわち「有用感」が高齢者の自尊感情に影響を与える重要な要因として考察できる。

次に、子どもからのソーシャルサポートの受領による満足感と自尊感情との間の関連性を説明してみると、男性では、生活的サポートの受領による満足感と自尊感情との間に有意な正の相関が認められ、生活的サポートの受領による満足感が高くなるほど、男性高齢者の自尊感情が高まっている。また、情緒的サポートの受領による満足感と自尊感情との間に有意傾向の正の相関が認められ、情緒的サポートの受領による満足感が高くなるほど、男性高齢者の自尊感情が高まる傾向にある。これらは、男性にのみみられる結果になっており、女性では、ソーシャルサポートの受領による満足感と自尊感情との間に関連性はみられなかった。

男性は、女性と比較すると、老年期以前から、家事的援助や病気の時の世話などの支援を家族に提供することよりも、家族からその支援を受領することのほうが多いと思われるが、特に配偶者である妻からこのような生活的サポートを受領することに関しては当然のように受けとめているのではないかと推測される。しかし、子どもから生活的サポートを受領した場合、それは「当然」という感覚よりも、一種の満足感を高めさせ、高齢者の自

尊感情を高めることにつながっていったと考えられる。これはすなわち、女性と比較して、家事のできない男性にとって、生活的サポートの面で、子どもが親のことを気にかけてくれ、親を大切にしてくれているという「重要な他者からの気づかい」が、高齢者の自尊感情に影響を与える重要な要因として考察できる。

また、子どもから情緒的サポートを受領し、そのサポートによって満足感を高めていけばいくほど、自尊感情もゆるやかに高まる傾向性を示しているが、大和ら²³⁾も、男性は「身近な人たちからの援助(情緒的サポートを指す)」に対する満足感と自尊感情との間に有意な正の相関を認めており、したがって、本研究の結果は大和らの結果を支持するものであるといえる。また、女性と比較すると、男性は、老年期以前から、友人との親密な関係を築き上げることや、地域社会活動の参加などを経験することも困難であるようにも思える。そのため、老年期に感じる不安やとまどいを誰かに話したくてもなかなか話せる人がいない場合が多く、その時に「話し相手になってくれる」「相談にのってくれる」などの情緒的サポートを子どもから受けると、男性高齢者は、子どもが親のことを気にかけてくれ、親を大切にしてくれていると強く実感し、それが結果的に、男性高齢者の自尊感情を高めているのではないかと推測される。それは、Sullivan¹⁹⁾の「重要な他者」がどのように自分を気づかってくれているかということが重要である、という命題

を傍証すると同時に、子どもからの情緒的支援が男性高齢者にとって、いかに重要であるかを示唆している。

結論と今後の課題

本研究では、他者や社会との関わりにおいて自らをどのように位置づけているのかという意識が自尊感情に影響を与えているという研究知見が得られた。しかし、これは、他者や社会との関わりの中で、現実にある自己の姿と、他者や社会との関わりの中で、こうありたいとする理想的な自己の姿とを比較し、その差が大きければ大きいほど、自尊感情が低下することを示唆しているともいえる。そこで、この研究知見を、高齢者個人の老年期のとらえ方とを関連させて考察すると、高齢者自身が、老年期を「喪失期」ととらえる場合、現実の自己と理想的な自己との間の矛盾を大きくさせてしまう可能性があり、それに対して、老年期を「挑戦期」ととらえる場合には、その矛盾を変容するために、新たな役割を獲得したり、活動に挑戦するなど、現実の自己を変えるように工夫をすることができるのではないかと推測される。もし、この推測が正しいならば、高齢者一人ひとりの老年期に対するとらえ方が自尊感情の高低レベルを左右するのではないかと考えられる。

また、本研究では、各ソーシャルサポートの授受評価と自尊感情との関連性においては、男性の場合は、物質的サポートにおける「有用感」と生活的・情緒的サポートにおける「重要な他者からの気づかい」に対する満足感が自尊感情の重要な関連要因であり、女性の場合は、生活的サポートにおける「有用感」が自尊感情の重要な関連要因であるという結論に達した。この自尊感情は、男性が老年期以前から担っていた家庭の経済的役割を、老年期になっても、「年金」というかたちで保持し、それによって、「子どもから必要とされている」「頼られている」という意識との間に関連性があった。さらに、老年期において、時として感ずる家事領域における不安やとまどいに対して、子どもが気にかけてくれ、親を大切にしてくれているという男性高齢者の意識も自尊感情との間に関連性があった。それに対して、女性の場合は、老年期以前から担っていた家事領域において、子どもに対して十分に支援してあげているという「有用感」のみが女性高齢者の自尊感情を高める結果になった。そのため、自尊感情と関連性があるとされる、ソーシャルサポートの内容、方向性（提供か受領か）は、男性、女性によって差異が認められるものと考えられる。

今後の課題としては、まず、男性、女性別に、対象者の属性要因、心理的・社会的要因が自尊感情に与える影

響力を重回帰分析法を使って分析、検討することが挙げられる。これは、老年期以前に、手段的役割活動を重点的に行っていた男性と、情緒的役割活動を重点的に行っていた女性とでは、それぞれの自尊感情に与える属性要因、心理的・社会的要因の加重効果、相互作用効果や主効果などが異なると推測されるためである。

また、本研究では、各ソーシャルサポートの授受評価と自尊感情との関連性を検討するために、ソーシャルサポートの授受の相手を「最も頼りにしている既婚者」に限定したが、今後は、通文化的視点に依拠しながら、「最も頼りにしている既婚者」を、親との同・別居群に分け、さらには、この既婚者を性別に分けて分析することが必要である。また、サポート・ネットワークのサイズという視点から、その既婚者の配偶者をもソーシャルサポートの授受の対象に設定し、分析することも、今後の重要な研究課題である。

文献

- 1) Atchley, R.C. Respondents vs. Refusers in an Interview Study of Retired Women: An Analysis of Selected Characteristics. *Journal of Gerontology* 24, pp. 42-47, 1969.
- 2) Atchley, R.C. Selected Social and Psychological Differences between Men and Women in Later Life. *Journal of Gerontology* 31, pp.204-211, 1976.
- 3) Breytspraak, L. M. and George, L. K. Self Concept & Self-Esteem. In Mangen, D. and Peterson, W.(ed). *Clinical and Social Psychology*, 1, University of Minnesota, Minneapolis, pp.241-302, 1982.
- 4) Cottrell, W. F. and Atchley, R. C. *Women in Retirement: A Preliminary Report*, Scripps Foundation, Oxford, Ohio, 1969.
- 5) 遠藤辰雄 「セルフ・エスティーム研究の視座」 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽編 『セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求』 ナカニシヤ出版 pp.8-25, 1992.
- 6) 藤田綾子 「老年期のパーソナリティと適応」 村井潤一・藤田綾子編 『セミナー介護福祉⑦ 老人・障害者の心理』 ミネルヴァ書房 pp.39-53, 1995.
- 7) 長谷川和夫 「老人の心理」 長谷川和夫・賀集竹子編 『老人心理へのアプローチ』 医学書院 1975.
- 8) 井上勝也 「老年期と生きがい」 井上勝也・木村周編 『新版 老年心理学』 朝倉書店 pp.146-160, 1993.

- 9) Kahn, R and Antonucci, T.C. Convoys over the life course. *Attachmant, roles and social support*. In Baltes, P.B. and Brim, O.G.(eds.) *Life-span development and behavior*. Academic Press, New york, 1980.
- 10) Kaplan, H.B. and Pokorny, A.D. *Self-Derogation and Psycho-social Adjustment*. *Journal of Nervous and Mental Disease* 149, pp.421-434, 1969.
- 11) 河合千恵子・下仲順子 「老年期におけるソーシャルサポートの授受：別居家族との関係の検討」 *老年社会科学* 14, pp.63-71, 1992.
- 12) 古谷野亘 「モラルに対する社会的活動の影響—活動理論と離脱理論の検証—」 *社会老年学* 17, pp.36-49, 1983.
- 13) 前田尚子 「老年期の友人関係—別居子関係との比較検討—」 *社会老年学* 28, pp.58-70, 1988.
- 14) Murray, R.B. and Huelskotter, M.M. *Psychiatric / Mental Health Nursing: Giving Emotional Care*. Prentice-Hall Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, 1983.
- 15) 西下彰俊 「高齢女性の社会的ネットワーク—友人ネットワークを中心に—」 *社会老年学* 26, pp.43-53, 1987.
- 16) 野口裕二 「高齢者のソーシャルサポート：その概念と測定」 *社会老年学* 34, pp.37-48, 1991.
- 17) 岡堂哲雄 「老年期と家族関係」 岡堂哲雄著 『心理学的家族関係学』 光生館 pp.147-166, 1976.
- 18) Rosenberg, M. *Society and the adolescent self-image*. Princeton:Princeton University Press.,1965.
- 19) Sullivan, H.S. *The interpersonal theory*. New York: W.W.Norton, 1953.
- 20) Taft, L. *Self-Esteem in Later Life: A Nursing Perspective*. *Advances in Nursing Science* 8(1), pp.77-84, 1985.
- 21) Ward, R.A. *The Impact of Subjective Age and Stigma on Older Persons*. *Journal of Gerontology*, 32, pp.227-232, 1977.
- 22) 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 「自尊感情尺度」 堀 洋道・山本真理子・松井 豊編 『心理尺度ファイル—人間と社会を測る—』 垣内出版 pp.67-69, 1994.
- 23) 大和三重・前田大作・野口裕二・中谷陽明・直井道子・坂田周一・玉野和志 「日本の高齢者の自尊感情とその要因分析」 *老年社会科学* 12, pp.147-167, 1990.

Summary

The purpose of this paper was to analyze what attributes and what social supports have an influence on the self-esteem of the Japanese-Elderly.

The sample for the analysis was composed of 323 older people who were sixty years old or over living in Osaka(male 186, female 137). The questionnaire was designed to investigate the present living conditions of the elderly. To measure the self-esteem of the elderly, Rosenberg's Self-Esteem Scale was used. As statistical techniques for the analysis of data, T-TEST, ONEWAY, Multiple Comparison and Pearson Correlation were used to test whether or not there exist relationships between the influential factors and their self-esteem.

First, the findings showed that the subject's attributes such as "sex difference", "marital status", "whether or not they have friends and a job", "subject's health", "the degree of satisfaction with financial status" and "the degree of taking part in community" had all significant effects on their self-esteem.

Second, the findings showed that among the subjects, men's self-esteem had a significant relationship with the degree of their feeling of usefulness which was derived from their offering the material supports for their children, and that for the elderly not living with their children, their self-esteem also had significant relationships with the degree of satisfaction caused by receiving domestic supports, material supports and emotional supports from their children. In addition to that, the findings showed that women's self-esteem had significant relationships with the degree of feeling of usefulness which was coming from their offering the domestic supports and material supports for their children, and also in case of the women living with their

children, women's self-esteem had a significant relationship with the degree of feeling of usefulness caused by their offering the emotional supports for their children.